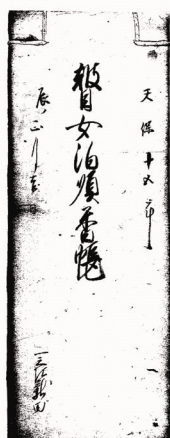


瞽女唄を今に伝える名主屋敷

一之江名主屋敷は、江戸時代中期における江戸近郊の土豪的性格を持つ名主の家として貴重な建物です。昭和29年(1954)11月3日に東京都旧跡に指定、昭和33年(1958)10月7日に東京都指定史跡に種別変更されました。また昭和56年(1981)1月13日に江戸川区登録史跡として登録、平成23年(2011)4月1日には江戸川区景観重要建造物として指定されています。



ドマの大黒柱



瞽女泊順番帳

名主であった田島家には、江戸時代初期から明治期までの約750点の古文書が残されています。低地の新田開発と近世村落を知るうえで貴重な史料です。特筆すべきは^{ごぜ}瞽女関係の史料があることです。江戸時代、三味線を伴奏にして唄をうたって歩いた、視覚障害をもつ女性旅芸人を瞽女とよびました。田島家文書の記録によると、^{ししゆく}止宿雑用費を村費でまかない瞽女を迎え入れて優遇していました。娯楽の少ない時代、村のひとたちは彼女たちの来村を待ちわびていたようです。

現在、一之江名主屋敷では、^{つきおか ゆ き こ}瞽女唄文化の保存・伝承・発掘に取り組んでいる月岡祐紀子さんを迎えて毎年一夜限りの「椿の里の瞽女唄ライブ」を開催しています。現在も椿が生い茂る彼の地にて、最後に瞽女の宿泊があったのは明治3年(1870)でした。それから数えて137年後の平成19年(2007)に再び瞽女唄が響き渡る日を迎え、以来今年もまた開催します。時代を越えて、一之江名主屋敷から新たな文化継承をし続けています。



月岡祐紀子さん